
虚構の遊戯

emanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚構の遊戯

【Zコード】

N1547F

【作者名】

emanon

【あらすじ】

「『ホール』男は宣言する。羽の様に軽い命、幾多の焰が明滅する荒野、生と死をひとまとめに取り混ぜた手札は傷ついた彼女を何処に導くのだろうか。『わたしを、生かすも殺すも。犯すのも、売り払うのも。貴方次第。こういうの、面白くない?』感想、評価、よろしくお願いします。

(前書き)

「樂園の引金」、「虎の傷痕」の外伝的なお話です。もちろん、短編でもお楽しみ頂けるかと想います。元のお話のイメージはこう。
<http://emanon98.es.land.to/index.html>

1、不満

薄暗い小さな酒場。

小汚い、使い古された一人掛けのテーブル。その中央にリボルバーが二丁、置かれていた。一つはオレの、一つは相手のものだ。ディーラーの手からカードが飛び、オレの前に滑り込む。五枚目だ。続いて、向かいに男に一枚、最後のカードが配られる。

これから運命を託すことになるカード、ゆっくりとめぐる。「役無し」だったが、エースが一枚、クイーンが一枚。まあまあだ。ワイルドカード（ジョーカー）無しで、配札から手役など簡単に引けはしない。

オレは無言でコインを投げた。勝負を続けるといつ意思表示の参考だ。

コインといつても金を一定の重さに分け、数えやすくしただけのものだ。このルーザーズコンティネント（負犬の大陸）では国家の信頼などない、唯一、金だけが、価値を田減りさせることなく、硬貨となり得る。

相手もオレに続き、コインを投げる。その瞳が僅かに歪んでいた。

「どうした？ 嬉しそうだな」

「いや、あまり手がはいらねえんで諦めて勝負しようと思つたのさ」

言葉での軽いジャブ。卓外の攻防。

オレは、其の言葉を「偽」とよむ。つまり、まともに勝負できるような強い手が入ったか、あるいは……

「へえ、そいつは怖いね

三枚くれ

薄ら笑いのポーカーフェイスをつくり、言った。

五枚の中、低い順に三枚を捨てた。そして、ディーラーが三枚こちらにカードを投げて渡す。その間、オレはずつと相手の男を注視していた。素人なら、すぐに配られたカードを確認しようと/or>うが、配られたカードなんてのは後でゆっくり確認すればいい。それよりも、相手のもう一つの可能性 勝負手が入った以外の可能性を潰すほうが先決だ。

ふと、相手の手が動く、左手で手持ちの五枚をまとめるやいなや、左袖にしまう。それと同時に右手が左の袖に消えた。

相手の手が止まる。オレが腕ごとその手を掴んだからだ。袖の中からは硬く薄い感触。カードの感触だ。すり替えるはずのカードだろ/。

「残念だつたな」

オレは内心ではハラワタが煮えくり返っていたが。とびきりの笑顔でそう言つてやつた。

相手の表情は見る間に凍りつき、歯をカタカタと鳴らし始める。始めにお互いのリボルバーをテーブルに置いた。その行為の意味は知つているようだ。

「ここじゃ片付けるのが面倒だ。立ちな」

ディーラーが言った、彼はテーブルのリボルバーを一丁拾つた。

一丁はおれに渡し、もう一丁は自らが持ち、銃口を相手の男に突きつける。

バーテンは面倒くさげに、男を立たせ、歩かせる。男は震え、涙を流しながら、歩を進める。

オレは男の末路を知つていて。だが、嘲りや、まして哀れみなんぞはこれっぽっちも芽生えなかつた。ただ、まともな勝負をしなかつた事への怒りだけがあつた。

オレは、ただ、博打がしたいだけだつた。喉がひりつく様な興奮が欲しい。楽しいギャンブルをやる。そうだ、ジャンキーと変わら

ない。

椅子にふんぞり返り、退屈紛れにギロギロと揺らしていると、悲鳴と銃声がセットで聞こえた。

すぐに、バーテンが男の有り金と身包みを持って現れるだろ。ついでに、そんなことはどうでもいい。

「おもしろくねえな」

それが率直な感想だった。

2、女

昨日と同じ椅子に座り、なんとはなしに外を見る。いい天気だ。夕日が真っ赤に燃えている。

昨日もいい天気だつた。明日もいい天気だらう。太陽つてやつはいつもいつも働きすぎだ。いつだつて勤勉に荒野からなけなしの水分を徴収していく。

アイツの寿命がどれくらいかは知らないが、この下らない世界を相手に毎日、毎日、何をそんなにマジになつてているのやら。テーブルの上には酒とカード。遊び人、ここに極まれり。

カードを取り、一つにわける。それぞれを中指と親指でホールドし、左右のカードが互い違いになるように入差し指ではじく。カードの擦れる小気味のいい音。リフル・シャツフルと言われるものだ。

『あつち（本土）』にいたときの癖はいまだ体に染み付いている。手持ち無沙汰になると、半ば無意識に体が動いた。

半円を描き、カードが一つの長方形に戻つていく。

そのまま右手に持ち替え、親指と人差し指、人差し指と薬指で再び二つに分ける。今度は片手のみだ。そのまま、角の部分を合わせ、カードを交互に挟みこむ。ワンハンドシャツフル。

シュラ、シュラ

カードの擦れる音が響く。

「なかなかの腕、ね」

不意に声がした。澄んだ女の声だった。

手元から視線を上げると、向かいに女が立っていた。歳は二十そこそこだろうか。ここじゅ 女は珍しい。まして、こんなにいい女は金鉱脈並みに貴重だ。その口元に浮かべられた淡い微笑はいつたいどれだけの男をまどわせたのだろうか。

切れ長な瞳に整った眉。美しいといつよりも凜々しく、舞台で、男性役の主役を張れば、相当の人気を得ることができるだろう。

腰まで届くであろう金糸の髪は後ろでまとめられ、柔らかく揺れている。

惜しむらくは服装だろうか、飾り気のない、ありふれたカッターシャツにチームのジーンズ。残念だ。彼女なら馬鹿高いシルクのドレスでも着こなすだろうに。

ふと、彼女の左腕に目が留まる。袖がまくられ、代わりに包帯が巻かれている。どす黒い血が縞状に滲んでいるところをみると、つい最近の傷、しかも、相当深いはずだ。

「見世物じゃないのだけれど……」

オレの無遠慮な視線に耐えかねたのか、女が言った。少し不機嫌な声もいいもんだな、と思つた。

「いや、その傷。そんな細腕でどんな荒事をこなしたのかと思つてね」

「ここじゅ、このくらいの傷、よくあるでしょ? それよりも、座つていいかしら?」

言いながら、向かいの椅子を指し示した。

「ああ、もちろん」

多少の不安材料があろうとも、こんな美人の誘いを断るのはもつたいない。

オレが答えると、女は椅子に座つた。

「バーテン、グラスだ おつと、ロック? 水割り? それともストレートがいいか」

「せつかくだけど、遠慮させてもらひつわ。それよりも」

「彼女はカードを指差した。

「そっちをやりにきたの」

「言いながら、彼女が笑った。

「へえ……」

かく言うオレも、笑みがこぼれるのを抑えられなかつた。ここのこところ、まともな勝負をしていなかつたし、なにより、美人の誘いだ。有り金を巻き上げて裸にしてやるのも悪くない。なにぶん、そっちのほうは御無沙汰だ。

「限界は……」

掛け金の上限のことだ。始めに決めておかなければいけない。

「もちろん……『無し（リミット）』でいいわよね？」

「上等」

オレの口元がさらりと釣りあがつた。勝つても、負けても、今日は面白い夜になりそうだ。

3、臆病と無謀

バーテンを呼び、ゲームを始める。

オレは腰のリボルバーをホルスターごと外し、テーブルに置いた。女もオレに続いて腰からナイフを、ジーンズをめくり、ふくらはぎからデリンジャーを外し、テーブルに置く。

バーテンという第三者をディーラーにすること、始めに武器をテーブルに置くこと、これらは言わば、お互いの安全保障だ。

特に後者は必須である。そうしなければ、ギャンブルに熱くなつた末、銃を抜いたり、銃を突きつけながら勝負にイチャモンをつけたり、などいう馬鹿が現れる。始めに『暴力』を取り上げておけば

そんな心配はいらない、というわけだ。

「それじゃあ始めるかい」

「ええ」

言いつつ、オレは見えない仮面 いつもの薄ら笑いを浮かべたポーカーフェイス を被る。

ポーカーというゲームを、ただ役を作るゲームだと思っているヤツがいるが、それは大間違いだ。そりや、フラッシュとかストレートだとか、そんなもんが毎回できれば負けることは無いだろうが、大勝することもない。手役が低ければ『フォールド』と宣言し、勝負を降りればよいからだ。そうすれば、被害は最小で済む。そして、流れが変わった時に改めて勝負すればいいわけだ。

ポーカーとは相手の心理を読み、かつ、操る遊戯である。

敵の瞬き、呼吸、手の動き、会話。様々なフェイクを搔き分け、真実を見つけ出し、こちらもフェイクで相手のミスを誘う。準備が整ったのを見計らい、バーテン ディーラーがカードを配る。

五枚そろったのを確認し、カードをめくつた。

勝負の流れのわからぬ、最初のカード。

ここで自分のカードを見るヤツは素人だ。オレは相手を、女を觀察する。カードの中身は未知数だ。誰だつて、未知なモノを見るとときは、多少の感情は表に出る。それが人間だ。

女はカードに手を伸ばし

『！？』

拾う前に一瞬、目が合つた。一瞬だったが、彼女が笑つたような気がした。

何事も無かつたかのように、彼女はカードを見る。まるで、路傍の石を眺めるかのような視線だった。何も感じられない。まるで虚無だ。

嫌な予感がした。

「お手柔らかに頼むわ」

女は、血の滲んだ左腕で、参加料としての「インを放る。

「こちらこそ、アンタ、なかなか強そうだしな」

オレも続く。

「どうかしら? 一枚」

彼女の細い指が端のカードをつまみ、捨てた。代わりに一枚カードを受け取る。

「怖いねえ」

手役のみを考えるのなら、一枚チェンジということは、手元にフラッシュ（全てのマークが同じ）かストレート（数字が順列）のできそこないがある、もしくは、手の中にツーペア（同じ数字のワンペアが二組）があり、より高位のフルハウスを狙っているかのどちらか、だ。

もつとも、ただのハッタリかも知れない。

カードが配られてからも彼女の表情に変化は無い。カードを見ていないようにすら見える。

『何考えてんだ? 美人だけに笑顔が怖いな』

次はオレの番だ。数字はバラバラ。そうそううまくいくわけはない。彼女も条件は同様のはずだが……

第一戦は様子見だ。数字の高い方から三枚残し、一枚を捨てた。戻ってきたカードも役無しだった。

この二枚交換もありふれたブラフだ。

正直に受け取るなら手元にスリーカード（三枚同じ数字）があり、もう一枚であわよくばフルハウス、といった捨て方。

フルハウスならほぼ最強の手であるが、スリーカードでもかなりの確立で勝ちを拾える手だ。

一度のチエンジの後、プレイヤーにはレイズ（上乗せ）、コール（勝負）、フォールド（降りる）の三つの選択肢が与えられる。

フォールドはそのまま勝負を降りる。この場合、参加料を失うことになるが、相手がレイズした金額は払わなくて済む。つまり、負けは確定するが、被害は最小で済む。というわけだ。

レイズは、掛け金を上乗せすることだ。通常は上乗せできる上限が決められているが、この勝負はノーリミットだ。いくらでも上乗せすることができる。

相手の上乗せした額を賭けることに同意し、勝負することを宣言する場合が「ホールだ。」ホールした場合、ショウ・ダウン。ホールした側から手役を比べ、より上位であつたほうが掛け金を受け取る。さて、どう出る？

彼女は足元の荷物に手をやり、コインを一掴み、無造作にテーブルへ投げた。『賭ける』という意味だ。コインがテーブルに落ち、ゴトゴトと重たい音がする。

不覚にもオレの表情が自然に崩れ、驚嘆を表したのがわかつた。この安酒場の酒ならば、ボトルごと買い占めて釣りがくる額だ。

「強気だな」

乱れてしまつたポーカーフェイスを取り繕う。

「そう？ 貴方がチキン（臆病）なんぢやないの？」

「わあね」

『『こいつ……いけしゃあしゃあと』』

安い、児戯にも等しい挑発。それだけいい手を引いたということか？ いや、本当に高い役があるなら、オレに降りて欲しくは無いはず。

まあ、いい。相手の情報が何も無い今、無理をすることは無い。今は何も見えなくとも、勝負を続けければ癖や、感情の一いつや二いつ、見えてくるだろう。

『『降り（フォールド）』だ、つきあつてらんねーよ』

手札をやつていられないとばかり、ディーラーに放り投げた。無論、裏面のままだ。わざわざ、相手に情報を与えることはない。だが……

「そう？ 残念。勝負すれば貴方の勝ちだつたのにね」

女は平然と、自身のカードを晒した。

低い数字の羅列。しかもバラバラ。チエンジのときに残した四枚

され、どうしようも無い手札だったはずだ。こんな手役にあの金額。無論、オレが「ホールすればこちらの総どりだった。

こいつ、何を考えている

「あんた、そんなに死にたいのかい？」

「やれるのなら、やってみてよ。チキンボーカイ（臆病者） ネクストゲームよ。ディーラー」「

4、全賭け（オールイン）

それから何度もゲームを行った。

額面だけでいうならば、オレの圧勝だった。というより、負けるはずが無いような勝負だった。

彼女のチヨンジは無意味だった。手役を作ろうという意思がまったく見えない。それでいて、なんとかの一つ覚えのようにハッタリをかまし、降りるということを知らない。

最初のゲームのような大金ではなかつたが、そこそこの金額を上乗せし、オレが、「ホールで受ける。ショウ・ダウンしてみると、役無し。その繰り返しだった。

しかし、勝つっているという実感は無かつた。それどころか、薄ら寒さ 一種の恐怖を感じていた。

何も見えない。

彼女が何を考えているのか。

どういう疑惑があるのか。

なぜ、そんな自殺のようなことを繰り返すのか。

その状況から何をするつもりなのか。

彼女の手の内で泳がれている。そんな錯覚から逃れられない。

「一枚頂戴」

彼女が手札からカードを投げる。血に滲んだ左腕で、何も見えな

い虚無の微笑で。

怖い

そう思つ。相手のことがわからないところのはひどく怖いものだ。

「一枚くれ

オレは手元にスペードのエース、ハートのクイーン、クラブのジャックを残し。一枚を捨てた。

戻ってきたカードはダイヤのキングと、ハートのエースだった。

ロイヤルストレー^{ハート・スペード}トのできそこない。エースのワンペア。

『愛と死、か』

そんなことをふと思つた。

彼女が同じように掛け金を吊り上げる。もう、持ち金はさほど残つていはないはずなのに

彼女を見た。相変わらず、彼女は見えなかつた。

『見えない、か』

見えない恐怖。そんなものに怯えていても埒が明かない。大体、結果がわかっているギャンブルなんてギャンブルじゃない。だから、オレは、こんな最悪の土地まで流れてきたんだ。

「レイズ（上乗せ）、だ」

今までの勝ち分を丸ごと、卓の真ん中に押しやつた。

「やる気になつてくれたの？」

彼女は不敵に笑つた。相変わらず、思考よめなかつたが、なんらかの動きがあつたことはわかつた。

「なに、負けてるアンタが可哀想に思えただけや」

動かないなら、動かしてやる。

「言つてくれるわね」ところで、この勝負、ノーリミットでよかつた？

「ああ、もちろんんだ」

「じゃあ、そこの

彼女が指示する方向には、自身のデリンジャーとナイフがあつた。デリンジャーはほぼ新品であつた。比べ、ナイフはよく手入れをさ

れているものの、かなり使い込まれた形跡があつた。今まで大切にされ、何度も彼女の命を救つてきたのだろう。

「二つをレイズ、ね」

『ちょっと待て！！』

オレの仮面が今度こそ崩れ去つた。

「アンタ。その意味がわかつてんのか！？」

単に、古道具としての価値を賭けるわけではない。ルーザーズコンティネント、この無法地帯で、己の身を守る武器を手放す。それは暴力に対して完全に無力になるということ。

つまり

自分の生殺与奪を相手に預ける事だ。

「わかつてるわ。わたしを、生かすも殺すも。犯すのも、売り払うのも。貴方次第。まあ、貴方が勝つたらだけど。こういうの、面白くない？」

「……オレは何で受けれ（コールすれ）ばいい？」

「あなたの有り金全部でどう？ それくらいの価値はあると思つただけど」

平然と言つてくれる……

相変わらず、表情から何も読み取れない。何を考えているのかわからない微笑のまだ。

ブラフか？ そこまでふつかければオレが降りると踏んでいるのか？

オレが今、降りれば、彼女は負け分の総てを取り返すことができる。

あるいは、勝てる自信があるのか？ この土壇場、運が味方したか。あり得ない可能性ではないが、そんなに都合よくいくものどうか？ いや、運だけが手段ではない。力による方法が残されている。

『イカサマか？』

オレの内面は揺れっぱなしだ。注意力が低下していないとは言え

ない。イカサマも気付かれなければ、ただのテクニックの一つだ。現場を押さえられなければ、まかり通る。

それに、彼女の意図がオレの『コール』だとすれば、初めから無意味なブラフばかりを行つたのは、オレの読みを甘くさせ、この大一番の勝負を受けさせるための布石だといえる。

くそつ、進むか、それとも退くか。どうする。

「さつさと決めてくれない。やっぱりチキンなの？」

ここに来て挑発か。それでも、彼女の思惑はわからない。どうして、こんな、わざわざ自らを危険に陥れるような真似をするのだろうか。勝つためなら、もつと効率的な方法があるだろう。

「どうか、コイツ、舐めた真似を

オレは、ある一つの仮説へと行き着いた。

ここに来て、未だ何もわからぬのは、初めから何も無かつたからだ。

「コイツは、初めから……

チクショウ、わかつたら急にムカついてきた。バカらしい。やつてらんねえ。

オレはもう、感情を隠すことも止めた。これで、終わりだからだ。

「『コール』だよつ！」

叫び、手札を卓に叩きつける。Hースのワンペア

「残念だつたわね」

彼女は悠々と手札を開けた。

「フラッショ、わたしの勝ちね」

そのカードは、総て黒色だつた。

「なんてね」

よつやく終わった。口元に浮かべた笑みが崩れていく。男はわたしの思惑など見通していたらしく、驚きもしなかった。そのかわり、機嫌が悪そうに眉間に寄せている。

偶然、手札がクラブとスペードになつたので言つてみただけだ。本当のところは単なる役無しだ。無論。彼の勝ち、わたしの負け。そう、終わったのだ。全部。

「わたしの負け。もつていつて」

男は苦虫を噉み潰したような顔で、自分のリボルバー、そして、わたくしのナイフ、デリンジャーを拾い上げる。

『勝つたんだから、もう少し嬉しそうな顔をしなさいよ』

少し腹がたつた。でも、終わってしまったのだから、どうでもいい。

「立てよ」

「お密せん、困るよ。ちやんと一階の自分の部屋にいつてやつてくれ」

ディーラーが言つた。どうやら、ソリは他の酒場でもそつであるように宿も貸していくらしい。

「ああ？ わかつてゐよー。着いて來い。くそつ！」

ブーツで椅子を蹴りつけ、一人で黙々と歩き出した。バーテンが嫌な顔をしたが、もめるのが嫌なのか、黙つていた。

唐突に突き飛ばされた。
わたしは、されるがままにベッドに倒れこむ。安っぽい骨組みが軋んだ。

室内に入るや否やこれだ。

どうか、そういう趣味の男か

ベッドと小さなテーブルと椅子のセットがあるだけの部屋だ。安宿では上等な部類だらう。テーブルの上には幾本かの酒瓶。カラな

のか、飲みかけなのか。

倒れたわたしに、男はのしかかってくる。

どうしようも無い暴力だった。硬い、筋肉のついた腕。防ごうとしても、今のわたしには何の手立ても無かつた。何度もわたしを救つてくれたナイフは、もう無い。

だけど、それでいい。

もう、どうでもいい。

左腕が痛む。血に染まつた包帯。わたしの罪の証。

これでいい。わたしが、平然と生きていてはいけない。

これでいい。これがわたしへの罰だ。

しかし、どうでもいいはずなのに、震えが止まらなかつた。男の手が襟元にかかる。これから暴力が、わたしを蹂躪し、破壊する。わたしなど、壊れてしまえばいい、壊れれば、楽になれる。壊れれば

胸元を捉んだまま、男の手が、後ろに引かれた。拳を握っている。

「つー？」

訝しく思つ間もなかつた。刹那、拳が額に向かつて振り下ろされた。

激しい衝撃。痛みで声も出なかつた。

「ふざけんなよ！ 勝負に手抜きしやがつてー！」

「…………？」

「」の男は何を言つているのだろう。

「博打やるなら真剣にやれ！ おちょくるのも大概にしろ！ 大体、下らねえ理由で、下らなえ事におれを巻き込むな！ 死ぬなら勝手に死ね こん畜生！」

言うだけ言つと、わたしを突き放した。そのまま、さつさと、備えつけの椅子に座り、酒瓶を煽る。

「こいつ！」

わけがわからないが。とりあえずは犯されず、殺されずに済みそうだが、そんな安心感より、罪を、覚悟を『下らない』といわれた

ことへの怒りがわたしを支配する。

「何よ！ 下らない理由の下らない事つて、あんた

「やかましい」

わたしが言い切る前に、男の怒声が遮った。

「下らねえから下らねえツツつてんだよ！」

わたしも負けずに言い返す。

「カードの勝負のほうがよっぽど下らないじゃない」

「ああ、そうさ。下らねえ。何もかもが『くだらねえ』んだよ。どうせ、あんたの事情なんざ、誰か殺したのか、死んだのか、大方そんなところだろうが、そんなもん、『こじりじゃいつものことだらうがッ』男は不機嫌を露にし、酒を煽る。

「黙つてたつて、お天道様はおれたちを片つ端から干物にするし、人は食い合う。そいつを、本土から来るるくでなしや、後先考えねえ娼婦の捨て子が補う。そんな世界で、十人、二十人死んだつて、どうつてことねえ。すぐに忘れられちまうだろうよ！」

「忘れるつて、そんなことできるわけないじゃない。わたしが殺したのは……」

わたしが喋るのを遮るように酒瓶が飛んでくる。頭に当たる前になんとかキヤッチする。

「五月蠅えよ。そんなもん、さつやと忘れちまえ。そのために酒さけがある。そいつを飲んでさつやと眠りちまえ。そうすりや、すぐに明日がくる。飲めよ、飲まねえなら、口移しで無理やり飲ませるぞ！」

「……わかつたわよ、飲めばいいんでしょ」

また、組み伏せられて、さらには口付けまでされるのは不愉快だ。

蓋を開けるや、そのまま口をつけた。「ゴボリ、ゴボリと音をたて、やたらと苦くて辛いそいつを胃に流し込む。腹立ち紛れに、半分ほどの中身を飲み干してやつた。 まづい酒

「……飲んだわ。これでいいんで……しょ！？」

それは唐突だった。ドグンと、自分の心臓の音が聞こえ、体が灼

熱のように熱くなる。手足の感覚が消えうせた意識がビリビリと黒い闇に吸われ、背筋がガクガクと痙攣する。

「な……に、こ……れ？」

「どうしておれが、人生相談の真似事なんてしなきゃいけないんだ。つたく」

男の悪態を薄れ行く意識の水底で聞くと同時に、何かが体に覆いかぶさつたのを感じた。

こんぢくしょうめ

オレは、酒を煽った。嫌な予感はコレだつたのか。どうして、よく知らない女、しかもギャンブルで負かした女に酒を奢り、ベッドまで譲る羽目になつたのか。

諸悪の根源は昨日まで、おれが寝ていたベッドで苦しそうな寝息を立てている。いや、よく聞けば寝息ではなく、死にそうな声で「頭……痛い。気持ち……悪い」と連呼しているようだ。

朝になれば追い出してやる。無論、金と『テリンジャー』、そしてナイフを返して、だ。あんなもん受け取つてやるものか。

あんな勝負は無効だ。博打ですらない。正当な戦いで無ければ、利益を得るわけにはいかない。獸であろうが、人であろうが、生死をかけて他者を食らう。命を賭けて生きている。

あんなものを『オレの勝利』というのは、荒野に生きる者達総ての冒涜だ。悪戯に殺すこと、悪戯に死ぬことなど許されない。

「……下らない

一人ぼやいた。

ふと、彼女が寝返りをうつた。横向きから仰向けへ。寝乱れたシャツから僅かではあるが、形のいい、それでいて豊満なバストが露出していた。白い肌。柔らかそうだ。まだ、あどけなさの残る寝顔。小ぶりで形のいい、ピンクの唇。

自分の喉が生睡を飲み込む音がした。

そういえば、最近、女を抱いた覚えがない。

やつぱり、犯つちまつか

「……なんてな」

おれは、もう一度、酒を煽る。酔つ払えば『アイツ』も跟つちまう。

こんな下らねえ世界だ。下らねえ理想一つ、守らねえと、もつとつまらなくなつちまう。

「ううん……あん……」

彼女が呻いた。女日照りのオレにはえらく扇情的に見えた。

「呑氣なもんだ。人の気も知らねえで……」

……酒場で酒を仕入れてくるか。これじゃ酒が無くなつちまう。

朝、起きあがみや否や、死ぬかと思つほどの頭痛と吐き気がわたしを襲つた。

苦しむわたしを、あの男は自分の部屋から強制的に追い出した。賭けたはずのデリンジャーとナイフ、金を押し付けて、だ。

意地でもつき返してやりたかったが、そうするだけの体力と氣力が無かつた。

そういうわけで、今、やむを得ず、酒場のテーブルに突つ伏している状態だ。それにしてもこんな一日酔いは初めてだ。

頭が痛い。

気持ち悪い。

うつぶ……

息をするだけで、もう、精一杯。

考えるのも、もう、面倒だつた。

もう……、死ぬ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1547f/>

虚構の遊戯

2011年1月26日10時08分発行